

【これは、小野しまと著『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて』に収録できなかった章「差別のない世界へ」です。「接触か無接触か」の章に続きます】

差別のない世界へ

清潔な言葉・不潔な言葉

人間どうしの直接的な接触がもっとあってもいいのではないか、などと考えている時に、私がふっと思い出したのは、やはり母のことだった。

母は、私が家に帰った時や食事の前には手を洗うことを強制し、外で触れるものがいかに不潔かということ、いろいろな例をあげて説明するのだが、その不潔のシンボルと言ってよいものが金銭だった。

お金は天下の回り物、という母の口癖についてはすでに述べた。ただ、これに付け加えた「お土産さんだっけ手にするんだからね」という言葉が、こういうことにピリピリ神経を尖らせている人から見ると、差別用語だということになりかねないのである。

母がそんなことを言っていた時代は、もちろん、こんな言葉ぐらいは何の問題もなく使えたのだが、最近はどこから文句が来るか分からないので、慎重にならざるを得ない。当時の母が言っていたということで大目に見てもらいたいものである。もう歴史なのだから。

私も大学で教えていた頃、「ノートルダムの何々男」の「何々」が出てくる教科書を使っていて、或る団体から追及されたことがあった。その先鋒をかついでいた学生たちがわが家にまで押しかけてきて、私に「反省」と「懺悔」を迫ったのである。

授業では顔を見たこともない学生ばかりなので、名前を照合して調べてみると、全員が欠席常習者で、不合格線上にいる面々だということが分かった。ちょうど年度末試験を前にした時で、この時期になると申し合わせたように、こういう騒ぎがあちこちで起こっていた。

フランス語のボシュが差別用語だというのなら、なぜ授業中に堂々と意見を述べて、みんなの考えを聞こうとしなかったのだ、と私は反撃した。彼らは、かなり遅い時間までねばっていたが、妻の出したコーヒーやケーキで軟化したのか、最後にはすっかり大人しくなって帰っていった。

結局、この騒ぎは、教科書の編者と出版社が廃本を決定したため、問題そのものはウヤムヤのままに終わってしまった。私は、この大学へは非常勤で週一回行っていたのだが、専任であった編者の要望もあって、その年度限りで職務を解かれた。

フランスでは、このような「何々」にあたる言葉、たとえば「目が見えない人」をいう言葉、「両足に長短のある人」をいう言葉など、昔から使っているものを今でも平気で使っていて、決して差別などとは思わない。

もちろん、本人に面と向かって「何々」などと呼びかけるようなことはしないが、あなた方「何々」はなどという言い方をすることはある。結局、どんな言葉でも、使う状況や使い方によっては差

別用語になるということであろう。

或る言葉に最初から差別を感じてしまうというのは、むしろ、さっきも言った直接的な接触の欠如に原因があるのではないかとさえ言いたくなってくる。

相手と自分の間に距離があって、その距離を最初から意味づけてしまう。正常な自分に対して異常な「何々」がいる。だから「何々」というのは悪い意味をもっており、それを使うのは差別だ、と。これは間接的に作られた自分の先入観の反映なのだ。

もっとも、私自身は差別が入っているとは思わないのだが、日本語の語感からいって、どうしても使えない言葉がある。英語のブラックに相当するヌワールという言葉だ。

友人のピエールは「ボクの妻はヌワールだから」などということをして、本人を前にして平気で言う。何の気がねもなしに自由に使える言葉だと彼は言うのだが、私にはどうしても、この言葉を口にすることができなかった。

こういう時は、たとえ外国語であっても、自分自身の語感に従ったほうがよいように思う。同じ言葉を使っても、自分の内面にしかない、人とは異なる何かが表示されてしまうからだ。

心にためらいがあれば、それがそのまま音になって響いてしまう。相手には、ぎこちない不自然な言葉としてしか伝わらない。

ネグロとかネーグルなどという実際に差別を含んだ言葉もあるから、自分の日本人としての心になすなから従って、相手を傷つけないことを第一の目標にするのが、言葉の清潔を保つための最良の方法になるであろう。

ペルソヌという言葉をつけて、ペルソヌ・ヌワール（黒い人）とすれば、日本人にとっても抵抗のない表現として使えるが、語法を知らないで変な加工をすると、かえって意味を悪化させることがあるから、要注意だ。

日本では、「乞食」と言わないで「お乞食さん」と言えば、いくぶん蔑んだ語調をやわらげ、何となく格好がついたような気分にさせてくれる。ところが、フランスで、乞食という言葉にマダムとかムッシュという語を加えたらどうなるであろう。完全に嘲笑的な表現になってしまう。

「乞食」に敬称をつけて意味をやわらげようとするのは、日本では間接的な表現によって言葉の清潔を保とうとする傾向があるからである。しかし、間接化することによって、かえって軽蔑の度を強めてしまうこともある。

差別用語とされている言葉を新しいものに言い換えようとして、ますます差別的な表現にしてしまうことも少なくはない。「お乞食さん」という言葉にしても、使う状況によっては、そのような敬称がかえってイヤミになることもあるだろう。

間接的な表現には、直接口にできないような複雑な感情が込められていることも多い。その点、フランスでは、むしろ直接的な表現にこそ、言語の中立的な記号としての役割を見ているようにも思われるのである。

もちろん、どんな言葉でも、相手に面と向かって直接それをぶつければ、なんらかの軽蔑的なニュアンスをもつことはある。日本語の「お食事さん」も、その点では同じであろう。

しかし、そのような、いわばムキだしの直接性は別にして、フランスでは、相手との直接的な接触さえあれば、カッコに入れた「何々」も差別用語ではなくなることが多い。

「俺のように乞食をしてると、いろんな人間が見えてくるんだ」

「そりゃ、君たち乞食の特権だよ」

こんな話を乞食と通行人がしている。彼らは乞食という言葉、はたから思うほど卑下した意味では使っていないのだ。むしろ、それは、一身上の都合により、自分が自由に選んだ身分なんだと言いたげである。

もっとも、言葉の使用には微妙なニュアンスがあり、時代や場所によっても変化するものだから、このような言い方が一般化していると主張するつもりはない。

最近では、乞食（マンディアン）という言葉はほとんど使われなくなり、若干意味の異なる SDF という略語が一般に使われるようになった。「住所不定者」という意味である。

「エス・デーフだが、ちょっと金を貰えないか」などと言われることがある。そうしてみると、自分から名乗るには、やはり少々意味の曖昧な、間接化された表現のほうが言いやすいのであろう。

モンゴリアンという差別語

フランスでも差別を含んだ言葉が問題にされないわけではない。しかし、それに対する取り組み方は、あくまで人々の直接的な使用にゆだね、その中で言葉の意味が定まり、自浄作用が起こるのを待つというやり方のように見える。

日本でトルコ風呂という言葉を一っしょに消し去ったことを考えると、何かまだるっこしい気もしないではないが、それは、言葉の間接化に慣れた国民性の違いに原因があると言えよう。間接化の行き着くところは、古いキタナイ言葉を消去し、新しいキレイな言葉に代えることだからである。

差別を含むという点で、フランス語の表現にも、すぐにでも止めてもらいたいようなものがいくつかある。とりわけ私が気になるのは、ダウン症患者を指すモンゴリアンという言葉だ。蒙古人というモンゴルという言葉が別にあるものの、モンゴル系の人間としてはあまりいい気持ちはしない。

これはフランスでも問題にする人が少しずつ増えてきて、ネグロやユーペン（ユダヤ人の蔑称）に並ぶ差別語だと書いているブログさえあった。最近、この語に代わって、トリゾミックという言い方もされるようになってきた。

だが、こういう風潮に対して、相変わらずモンゴリアンという言葉を使う人も少なくはないのである。ダウン症患者で、映画に何本か主演し人気を集めている青年がいる。彼は、テレビのインタビューで、自分のことを平気でモンゴリアンと言っていたし、周りの人たちも何のわだかまりもなく、この言葉を使っていた。

言葉を差別用語にしてしまうのは、言葉そのものではなく、むしろ差別の意識だということをよく示している例と言えるかも知れない。

しかし、モンゴル人の方はどんな気持ちでこの言葉を受けとめるかという問題は残る。ダウン症患者に向かってモンゴリアンという表現を直接用いることは、その本人に対する差別の意識がないかぎり許されるかも知れない。

しかし、この語は間接的には、モンゴル人の顔の特徴を示唆しており、その場にはいないモンゴル人に対して、いわば「陰口」的な使われ方をしている。これは、この人種にとってはたいへんな侮辱であり、差別だということになるであろう。

この言葉を使っている人の中には、モンゴル人とその国家についてはほとんど知識がなく、この語を単純に医学用語だと思い込んでる人もいて、差別の意識などまったくなしに天真爛漫に使っているということもある。

ところが、このような人に限って、今度は、モンゴル人を指す正式な言葉モンゴルとダウン症患者を指すモンゴリアンとを混用し始めたりするから、事態をかえって悪化させかねない。

フランス語では、ペンギンを意味するマンショも、「手や腕の不具な人」という原義からすると、同じように差別を含んだ嫌な言葉である。ペンクエンという言葉が別にあるのだから、それを使ったらよさそうなものだが、人々はこのマンショの方が気に入っているらしく、メディアもさかんにこの言葉を使っている。

もっとも、フランスの国民的英雄であるナポレオンの軍隊がロシアから退却してくるさまを、雪原を進むマンショの群れに見立てたコマーシャルもあるくらいだから、マンショという言葉はむしろ可愛らしいといったイメージが強いのかも知れない。

だが、モンゴリアンの場合と同様、この語は、直接呼びかけられているペンギンを差別しているわけではないにしても、間接的には、手や腕の不自由な人々を差別していることになる。

言葉から差別的な意味が引き出されるのは、このように間接的な使用によることが多いのである。相手との直接的な接触がないのに、相手の外部から、いわば「陰口」として使われた言葉がいちばん危険である。

それは、相手のいないところで言われた、相手に聞かせてはならない言葉であって、独断的な思い込みとか、根拠のない悪口といったレベルにとどめておくべきものなのである。

ところが、その言葉を、いきなり暴力的に、ムキだしの直接性をもって相手に叩きつけてしまうことから、差別的な意味合いが引き出されることになる。

同じことは、言葉による差別だけではなく、イメージによる差別についても言えるであろう。

手や腕の不自由な人々の知らないところで、彼らの呼称とペンギンのイメージとが結びつけられる。これだけでも間接的な差別であるが、以後、彼らをマンショという名で呼ぶならば、これまでこの語がもっていなかった差別の意味を、目に見える直接的な形で引き出すことになる。

見せてはならないものを見せることは、言葉やイメージの不潔さであり、清潔なのはそれを隠すことである。

精神の清潔ということから言えば、人間どうしの直接的な接触をキレイに保つのは、やはり何と云っても、言葉の直接性であろう。言葉による間接化は、差別的な表現をはじめ、むしろ不潔さを作り出すと言える。

ところが、間接的に作られたその不潔なものを、いきなり言葉の直接性のもとにさらけ出すとき、私たちはこれまでに手に入れてきた清潔をすべて失うことになる。

キレイな世界、キレイな文化を創り出すためには、最後のものは隠しておかなければならない。無接触の部分を残しておく必要がある。

汚れてたってプライドはある

パリの私たちのアパートに近いムフタル街の北端にはコントロールスクアルブという広場があって、その中央の円形噴水池の横に浮浪者たちの溜まり場がある。彼らは、乞食ではなくて浮浪者（クロシヤール）だ。この区別はかなり重要である。浮浪者は、原則として物乞いはしない。

原則としてと言ったのは、たまに1ユーロか2ユーロ金をくれと言うことがあるからだ。映画俳優のアンソニー・クインによく似た、体格のいい浮浪者がいて、たまたま近所のスーパーの前で私と出会った時、「1ユーロくれ」と言ったことがある。

私が硬貨を渡すと、アンソニー・クインは喜色満面、飛び上がってスーパーの中に走り込んでいった。ブドウ酒を買うのに、1ユーロ足りなかったのである。

彼は、ブドウ酒の瓶を握って、そそくさと広場の噴水池のほうへ向かった。噴水池の傍らには地下鉄の換気口があって、そこから暖かい風が吹き出してくる。いつも数人の浮浪者たちがたむろしていて、ブドウ酒で酒盛りをやっているのだ。

通りがかりの人がそこに立ち止まって、彼らと談笑している光景に出会うのも珍しくはない。観光客らしい若い女性が二、三人、同じ換気口の上に坐って、キャッキヤと騒いでいるのを見て、驚かされたこともある。

パリのバス停も、乞食や浮浪者の溜まり場になっていることがある。彼らが何人かベンチに腰掛けているのをよく見かけるのだが、時には、ふつうの服装の人が隣りに坐って、話し込んだり、一緒にものを食べたりしていることもある。

例のアンソニー・クインは、ふだんは私たちとすれ違っても不機嫌そうな顔を見せるだけで、横を向いてペッとツバキを吐いていく。どうやら私たちを「差別」しているらしいのだ。

浮浪者の顔ぶれはときどき変わるらしく、この男も一年ほど前から姿を見せなくなってしまった。噴水池の横に坐っている男たちも、三、四年のあいだに一新してしまった。彼らはみんなどこへ行ってしまったのだろう。奇妙なもので、顔なじみの連中がいなくなると、何か一抹の淋しさを感じてしまうのだ。

同じように、いつのまにか姿を消してしまった浮浪者で、片腕に松葉杖を突いている男がいた。或る冬の夜、地下鉄の吹き出し口の上に坐っていながら、毛布にくるまりガタガタと震えているの

を見た。

男の前には紙コップが一つ置いてある。私は、黙ってそこに金を入れようかと思ったのだが、何となく躊躇させるものがあった。そこで、「金が必要かどうか」と彼に聞いてみたのである。

「俺は、食べるものも飲むものもたっぷりあるから、金はいらぬ」と、男ははっきり答えた。

そして、目の前の紙コップをつかみ、グイと飲み干したのである。地面にコップが置いてあるのは、金を入れてもらうためではないということを、男は私に見せたかったのであろうか。

私は、紙コップにいきなり硬貨など入れなくてよかった、と思った。この男のプライドを傷つけるばかりか、飲みさしのブドウ酒を汚してしまうところだった。彼は、寒さに震えながらもニコリ笑い、ボヌ・スワレ（良い夜を）と言った。

日本では、「乞食」を差別用語だと決めつけている人たちが、それでは代わりにどんな言葉を使ったらよいのかと問われると、ホームレスがいいと答えることが多い。

私は、この答には呆れるのである。それこそホームレスに対する大差別ではないか。ホームレスとは、いろいろな事情で住居を失ってしまった人を言うのであって、物乞いをする人という意味ではない。

もちろん、ホームレスになってしまった結果として、乞食になる人もいれば、浮浪者になる人もいる。しかし、フランスでもそうだが、ホームレス（サンザブリ）は別のカテゴリーに属しており、昼間はちゃんと勤めに出ている人もいるくらいなのだ。これは日本でも同じであろう。

だいたい私は、戦後の一時期を除いて、日本では正真正銘の「乞食」を見た記憶がない。駅の地下街や道路に坐っている人たちは見たが、その人たちの前に金銭の受け皿や箱が置かれている光景はおよそ見たことがないのである。彼らが食べ物を捨てて歩くことがあっても、それは決して物乞いではない。

このように言うのが、私の観察不足のせいでないとしたら、日本には、乞食という言葉で差別されるような人々はおもや存在しないと断言してもよいであろう。

パリでは、東ヨーロッパから来たと思われる、主として女性たちが、スーパーの入口の前などにいて、出入りする客たちに金をせびっている。これは、れっきとした乞食業で、出稼ぎのアルバイトだと言われている。国へ帰れば、ふつうの主婦なのだ。

彼女たちは概して身なりがちゃんとしており、スカーフをかぶっていたり、装身具を付けていたりする。一日の仕事が終わると、スーパーや食料品店で買い物をして、大きな袋を下げて宿泊先へ帰っていくのだ。ホームレスでも浮浪者でもない、しかし乞食であることには変わりないのである。

㊦家ではいつも試食会

このように、社会の底辺に生きる人たちが自分の身近にいて、同じ街の住人になっている。いろんな職業の、いろんなタイプの人間に混じって、一緒に暮らしている。こういう雰囲気は、戦後の一時期を最後に、日本では絶えて感じたことがなかった。

噴水池のそばにたむろしている男たちの顔ぶれは数年ごとに一新するが、それまでの間に、みな見覚えのある顔になり、そのうちの何人かは顔なじみにさえなっている。つまり、むこうでもこちらの顔を覚えているといった間柄であり、たまに出会えば懐かしさを感じるほどなのだ。

横浜市内の、わが家のあった界隈は、戦前と戦後、いくぶんそれに似た雰囲気をもっている町だった。わが家へも、ときどきボロをまとい、悪臭を漂わせた人がやって来て、金や食べ物を無心していった。

私はよく、その手渡し役を母に仰せつかって、彼らのところまでお金や食べ物を持っていったが、恐れと好奇心の入り混じった目で、彼らの顔を見上げているうちに、何人かの特徴をすっきり見覚えてしまった。おそらく、彼らもこの界隈の住人だったにちがいない。

私の母は、こういう人たちと親しく付き合うところまでは行かなかったが、それに近い気っぶはあったと思う。母は、お乞食さんという言葉を使ったが、そのお乞食さんに触れることを何とも思っていなかった。

特に、戦後の日本全体が貧しかった時代、母は隣組の組長をしていたこともあって、そのような身分の人、あるいはそれに近い人の世話をすることが多かった。そのつど、なんの別け隔てもない、開けっぴろげな態度で彼らに接しているのを見た記憶がある。

そして、いま思い出すが、母は金銭に触れたあとは手を洗えと言ったが、金銭に触れるなどは言わなかった。そこが、武士たちの感覚とは違うところである。金銭は、母にとっては不潔なものだったが、不浄なものではなかった。そして、おおむね、不潔なものに触れることは黙認したのである。

それでもなかったら、私や弟たちを育てることなどできなかつただろう。私たちがどんなに汚れて帰ってきても文句は言わなかった。

時には、とんでもないものを衣服に付けてきたり、また、お漏らしで汚してしまったりと、いろいろなことがあったが、母は嫌がりもせず、すぐに洗濯板とたらい桶を出して洗い始めるのだ。

ただ、手を洗うことと、衣服の汚れがひどいときには着替えをすること、肌から何から全身が汚れているときには体を洗ったり、時には風呂に入ることが、義務として私たちに課せられた。

わが家は、戦前、当時としては中流家庭の集まっていた住宅地のはずれにあつたので、野菜や果物や魚などを売りにくる商人たちが荷車を止めやすく、いつのまにか彼らの溜まり場になっていた。

母にも、こういう人たちとはすぐに仲良くなってしまう気質があつたので、わが家の玄関先は、彼らが一服し、しばしの雑談をしてゆく格好の場所になっていた。

ここを訪れる商人のうちに、一風変わった親子連れがいた。母親がリヤカーを引っ張り、私より二、三歳年上の男の子が後についてきた。あの頃でいう屑屋を商売としており、今日の言い方をすれば、廃品回収業あるいは再生資源回収業といったところだ。

母は、この母親ともすぐに親しくなって、立ち話をしたり、家の上がりがまちに坐ってもらって、

お茶を出したりしていた。その間、男の子と私は、いろいろと遊びの種を見つけては戯れているのだ。

母は、この人を「ゴミ屋さん」と呼んでいたが、これにはまったく他意がなくて、他の商人たちを野菜屋さんとか魚屋さんと呼ぶのとまったく変わりがなかった。

それに、面と向かって話をする時はたいてい「奥さん」と言っていた。「ゴミ屋の奥さん」というのは、なんともアンバランスな表現だが、それが母の感覚だった。

母の提案で、回収業の母親がこの辺の住宅地を一回りしてくるあいだ、男の子をわが家で預かることになった。足手まといになる子をわざわざ連れて行かないで、ここへ置いてっいたらいい、ウチの子も仲間ができて喜ぶから、というのが母の言葉だった。

こうして、私とその男の子は、週に何回か家で一緒に遊ぶことになった。私たちは絵本を見たり、ブリキの自動車や刀で遊んだり、時には、取っ組み合って相撲の真似をしたりした。おやつの前には、もちろん、二人とも手を洗わされた。

こういうことは、母にとってはごく普通の、何でもない行為だったのだが、隣近所の人たちにとっては奇行のように思えたらしい。いろいろな中傷の声が母の耳にも届いていたようだった。

しかし、母には、或る確固とした信念があった。手や体を洗えば清潔になれる、掃除をすればキレイになる、と単純に信じていたのだ。

手や体が汚れても洗えば落ちる。一日の家の汚れは、一日の終わりに掃除をすればなくなる。洗うとか掃除をするということは、そのためにやることなのだ、というふうに単純明快に答を出していたのである。

それで、夕方に近くなると、玄関先から、座敷、台所、手洗いと掃除に取りかかるのだ。特に、畳の清掃には熱心で、濡れた新聞をくしゃくしゃに丸めて部屋にばらまき、それを箒で掃き集めたあと、雑巾で畳を丹念に拭き清めるというやり方だった。

これで、畳は完全にキレイになったと、母は信じたようである。濡れ新聞をばらまくというのは、当時多くの家庭でやっていたことらしいが、これをやると畳がしだいに黒くなるのが分かってきて、母もそのうち、箒で掃いて雑巾がけをするという単純な作業に戻ったのである。

母は、このように、自分たちの手や体を洗うことと家を掃除することに清潔のすべてを託し、その他のことについては驚くほど寛容であった。人間の生きる場がどういうものかということをよく知っていたのであろう。

私たちにはひどく厳しかったのに、出入りする商人たちにはきわめて寛大であった。母は、いったん彼らと親しくなると、彼らが私たちの誰よりもお金に手を触れていることや、したがって誰よりも手が汚れているにちがいないということを、まったく考慮しなくなってしまうのだ。

商人がむいてくれたミカンの味見をしたり、手づかみで持ってきたジャコをつまんでみたりと、母は実に天真爛漫で、彼らの提供する食べ物を何のこだわりもなく口にしたりした。

私も、傍にいる時には試食のご相伴をさせられたのだが、こういう時には妙なもので、あまり前後の状況など頭になく、これはこれでごく当たり前のことのように思え、キタナイなどという意識はまるで出てこないのだ。

だが、いま思い出してみると、商人のごつごつした黒い指がつかんでくるスイカの切れ端やミカンの房などが目に浮かび、よくあれに口を付けられたものだと思うのである。これは、今の私にはとうていできないことの一つなのだ。

スイカの季節になると、母が買ったスイカの一つを水道の水で冷やしておいて、売った当人も含めて、みんなで「味見」をするのが慣例になっていた。こういうことに気を良くした商人が、自分からもいろいろな食べ物を探してくるので、わが家はいつも試食会のような観を呈していた。

人間と人間との直接的な触れ合いを実現し、生き生きとした人間関係を築くためには、「共に食べる」ということがいかに重要か分かるのである。

そういう場にあっては、他者の身になって行動すること、多少は野蛮になることを覚悟しても、汚れたものを口にしたり、不潔さを我慢する必要があるということ、私は母の生き方から学んだように思う。

私たちには厳しく、他者には寛容に、という切り替えは、母が意識的にやったことではなく、むしろ自然的、本能的に選んだ行動であって、母にとっては、我慢するという気持ちさえなかったと思う。

それでも、どこかに切り替えの意識があったということは、母のうちに、何よりも自分自身の不潔を恐れる気持ちがあり、できるだけ自分を清潔に保とうとする思いがあって、他者を不潔と決めつけたり、他者によって汚されるという気持ちはなかったという証になるであろう。

味見するのは楽しいけれど

フランスでもマーケットへ行くと、ミカンの皮をむいてくれたり、イチゴやチョコレートをつまんでくれたりして、味見を勧められることがよくある。これは日本の店でも同じだ。

それでも、日本の方がはるかに清潔には気を使っていて、スナックには爪楊枝を付けたり、物によってはプラスチックの小カップを付けたりしてくれるが、フランスのほうはもっと粗野だ。

もっとも、日本でも、桶に山盛りにしたダシジャコを絶えず手でかき混ぜながら、通る客に「食べてみな、食べてみな」と誘っている豪傑を見たことがあるので、あまり一方的にフランスの悪口を言うわけにはいかない。こういうのは、万国共通の売り場風景と言ってよいだろう。

清潔マニアの私たちは、こういう時どうするかということなのだが、「食べてみな、食べてみな」と言われたって、とうてい食べられない代物もある。まず、いま言ったようなダシジャコはご免だ。イチゴも食べられない。というのは、私たちは自分で洗ってでなければイチゴを食べないからだ。

むいてくれたミカンやチョコレート、スナック類は微妙なところだ。私たちもツライところなのである。味見を勧めてくれる商人の好意を、むげにハネつけるわけにはいかない。

いちばん困るのは、相手を嫌がってると思われることなのだ。相手が嫌なのではない。汚れた食べ物嫌なのだ。それから、それを持つ自分の手が嫌なのだ。

そこで、私たちは相手を傷つけることのないように、差し出された物はよこんで受け取る。そして、食べてもよいと思われる部分だけを試食するのだ。自分の指がつまんだ部分はこっそり捨てる。捨てる場所がなければ、手の中に隠して持っていく。

試食を断っておいて商品を買うこともあるが、こういう時はわりと円満に行くのだ。特にフランスでは、冗談なのか本気なのか分からないようなおしゃべりが通用するので都合がいい。

そのときの状況に応じて、「今は食事をしたばかりで食べたくないんだ」とか、「これからレストランに行くからお腹を空かしておきたいんだ」などと言ったり、時には、「夕方はイチゴを食べないことにしてるんだ」などと訳の分からないことを言って、いったんは断る。

「でも、これは貰っていくよ」と言うと、店員は、いろんな人間がいるもんだ、といった面白そうな表情を見せて納得するのだ。試食をイヤがる人間はこちらでは珍しい部類に入るので、たぶん気分的な理由なんだろうぐらいのところで済んでしまうらしい。

とにかく、何度も言うように、清潔マニアとして心外なのは、他人を嫌がっている、他人を不潔だと思っていると見られることなのだ。

もちろん、中には排他的な清潔信者もいないわけではないが、それはクルティエの言う、罪の意識のないキリスト教徒のようなもので、自分自身を無条件に清潔だと思い込み、他人は不潔だと最初から決めつけているタイプである。

こういう人がいるからと言って、清潔好きは皆そうだと考えるのは、論理学でいう、部分によって全体を判断する誤りだということになる。

私たちには自分を責める意識はある。自分自身の不潔さを何よりも恐れており、それによって他者を汚してはならないと思っているのだ。

ただ、母と一緒にいた頃のように、何の疑いもなく、汚れたものでも平気で口にしていた自分にはもう戻れない。

人間どうしの直接的な接触が重要であることは充分に知っている。しかし、どんなにキタナイものでも喜んで食べるような直接性にまではどうてい行けそうもない。そこまで身を投じることを許さない何か、すでに私たちの内にはあるのだ。

[2007/08/04 magmag]